

図書館資料論序説

－資料形態の多様化と読書行動の将来への展望のために－

村 田 修 身

1. は じ め に

図書館資料とは、図書館が収集対象とする資料であるから人類の知的記録類の全般を指すものと言うことができる。そして、「図書館資料論」は図書館司書養成コースの中に組み込まれた科目の一つである。その内容について日本図書館協会図書館学教育部会の『図書館学教授要目』（1976）でみてみよう。

まず、この科目の目標が次のように示されている。

「図書館資料は図書館機能の全体の問題であることを、図書館政策のうえから、また大きい社会活動の基礎としても考えねばならない。それで図書館資料の社会における役割を検討し、情報源としての発展から性質を論じ、その収集と利用、選択と出版流通の問題点を明らかにし、また具体的な個々の問題点を解決して、日常業務に結びつけるように学習させる必要がある。」⁽¹⁾

続いて示されている内容の項目を拾いだせば以下のとおりである⁽²⁾。

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. 情報と図書館資料 | 6. 政府刊行物 |
| 2. 知的自由の問題 | 7. 児童・青少年の読書資料 |
| 3. 蔵書構成 | 8. その他の図書館資料 |
| 4. 図書の評価 | 9. 資料収集のツールと実務 |
| 5. 逐次刊行物 | 10. 出版事情 |

この『教授要目』以後いくつかのテキストが出版され、「図書館資料論」の内容が幅広く、豊かなものになってきているが、さらにマルチメディア等を視野に入れた新たな資料論の構築が待ち望まれる。本稿では「図書館資料論」の導入部を提示し、併せて、新しい視点を模索してみたい。

2. 「本」についての専門家

司書は本についての専門家であることが求められるが、そこには次のように二つの異なった次元のものがある。

2. 1 「本」そのものについての専門家：

以下の3者をあげることができる。それら専門家の知識には重なり合うところもある。

村 田 修 身

司 書	「本」の本質、歴史、生産・流通などについての知識を有する
書 誌 学 者	「本」の形態や構造などについての知識を有する
その他（流通過程の関係者など）	「本」の生産・流通などについての知識を有する

2. 2 「本」を扱うことにかけての専門家：

ここには、司書とその他（流通過程の関係者など）があるが、司書についてのみ取りあげれば次のようになる。（司書の知識は広い範囲のものが要求されるが、ここでは「本」を扱うことに限定して、その主なもののみをあげた。）

司書の知識の領域	対応する司書科目	関連する内容
選択・収集	図書館資料論	本についての専門家としての知識
組織化	分類／目録法	
蔵書管理	図書館資料論	利用者に提供すべき「本」を最も利用しやすい最善の状態に保持するための蔵書管理の方法や理論についての知識
提供	参考業務 図書館資料論	

なお、ここで「本」という語は、図書館資料の代表点として用いている。したがって、本以外の図書館資料についても学ぶ必要があることは言うまでもない。また、逐次刊行物や郷土資料は「資料整理法特論」などでも扱われることもあるが、それらの知識の相当部分は「図書館資料論」の範疇でもある。

3. 図書館資料の区分のしかたと種類

区分のしかたによって図書館資料の種類もさまざまに分けられる。たとえば、

- | | | |
|----------------------------------|---|----------------|
| (1)法律の規定によるもの ⁽³⁾ | } | (これらの例示は省略する。) |
| (2)審議会の答申にあげられたもの ⁽⁴⁾ | | |
| (3)図書館種別による区分 ⁽⁵⁾ | | |
| (4)利用のしかたによる区分 ⁽⁶⁾ | | |

①全体を通読することによって本来の利用目的が達せられる種類のもの。一般図書。一次資料（原資料。Original Sources）。

②一部を参照するだけで利用目的が達せられる種類のもの。参考図書。二次資料（Secondary Sources）。

(5)認識のしかたの相違による区分⁷⁾

- | | | |
|-----------------------|---|--|
| 図
書
館
資
料 | { | a) 読書資料 (文字その他の記号が主となる悟性認識の資料) |
| | | (1)印刷資料 (図書、雑誌、新聞、パンフレット、etc) |
| | | (2)非印刷資料 (写本、古文書、古記録、新聞などのマイクロ写真版、etc) |
| | | b) 感性資料 (図像や音声などが中心となる感性認識の資料) |
| | | (1)視聴覚資料 |
| | | (2)そ の 他 |

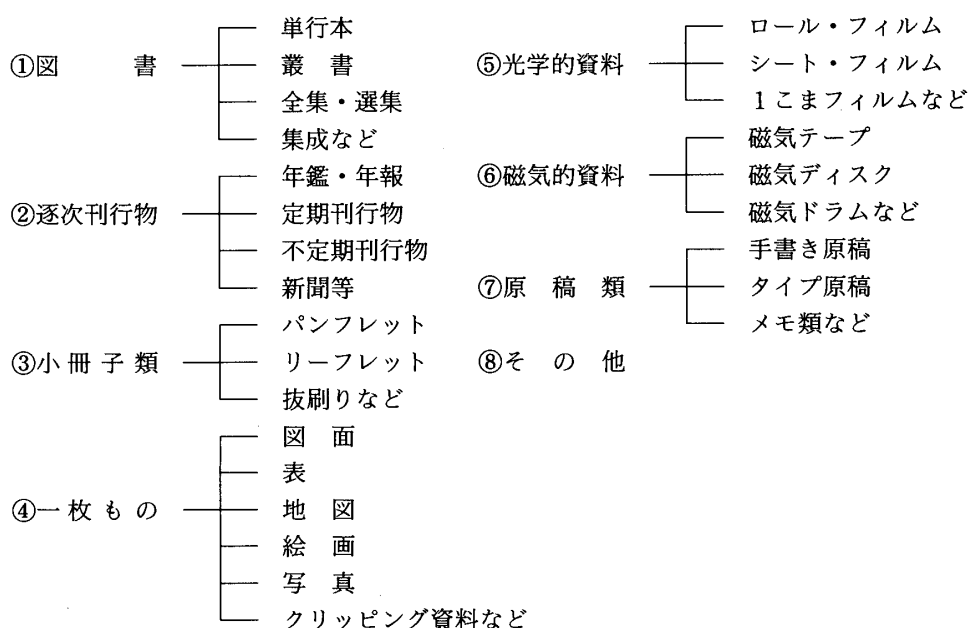
マイクロ・フィルムをその内容に関係なく視聴覚資料として扱う図書館もあるが、そういうところでは目録組織も資料区分毎にファイルされることが多い。すると、利用者はある資料を検索するために複数の目録ファイルに当たらねばならず、見落とす可能性もある。こうした問題を解決するためにも、ここに示されたような基本的な考え方が重要である。

(6)記録をより拡大した観点

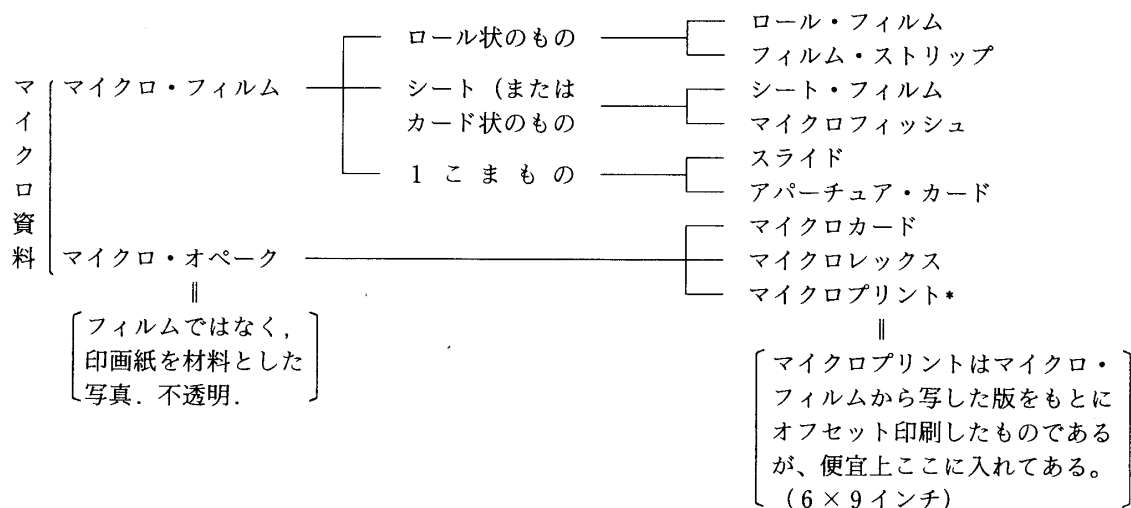
図書以外の資料 (Non-book Materials) をジェネリック・ブック (Generic Book) と呼ぶことによって図書館資料のとらえ方に新しい広がりをもたらしたとされるショアーズ (Shores, Louis: library Education. 1972) の考え方がある⁸⁾。

(7)形態による区分

図書館資料の形態による区分は多くの専門家によって取り上げられているが、なかには区分の原則が交錯していたりするものもある。筆者の知る限り、最も優れているのは長澤氏の区分である⁹⁾。



(8)形態による区分〈マイクロ資料の部＝前項と同じ長澤氏による⁽¹⁰⁾〉



(9)ニューメディア出現に伴う区分

図書館資料を、①印刷メディア、②非印刷メディア、③ニューメディアに大別し、ニューメディアを次のように区分する案。〔A)よりもB)の方が分かりやすい。〕

A) ニューメディアの区分〔その1〕⁽¹¹⁾

- ①レベル1：－ 衛星放送、光通信など
- ②レベル2：－ サービス総合ディジタル網 (ISDN)、CATV、ファクシミリなど
- ③レベル3：－ LAN、ビデオテックス、データベースなど

B) ニューメディアの区分〔その2〕⁽¹²⁾

- ①パッケージ系：－ パソコン、ワープロ、CD、ディジタル・オーディオテープなど
- ②ケーブル系：－ CATV、キャプテン・システム、INS、データバンクなど
- ③放送系：－ 衛星放送、文字多重放送、高品位テレビなど

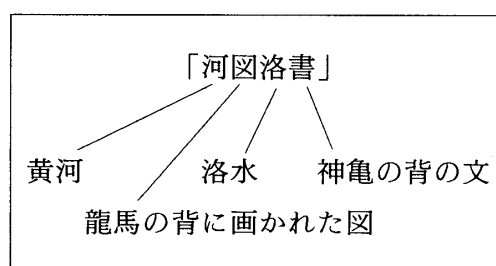
4. 図書館資料に関する基礎知識

ここでは、図書館資料の全種類について述べる余裕がないので、図書や逐次刊行物など主要なもののみを取り上げる。

4. 1 図書〈語義、定義、その他〉

4. 1. 1 「図書」の語義・類語について

- ・「図書」の語は「河図洛書」の略であることはよく知られている。「図書」は多くの類語をもって、それらを代表して学術用語となっている。



- ・書籍、文籍、図籍（トセキ、ズセキ）などに用いられる「籍」は、竹簡、すなわち文字の書いてある竹片の意。これを韋革（なめし革）の紐で綴じたものが今日の書物の原形の一つ。（象形文字「冊」のもと）
 - *“韋編三絶”＝孔子が『易経』を愛読して、綴じ糸が幾度も切れたという故事。これによれば、孔子が読んでいたのは竹の本ということになる。
- ・「本」は、象形文字「木」と「下」とが合わさったもの。木の下の部分の意。「もと」の意から「物事のおこり、基本」の意が生じ、さらに、「もとをたずねる」すなわち、学ぶ「もと」となるものの意に転じた。
- ・貝多羅本（貝葉本）＝棕櫚の葉に似た、厚くて固い葉を乾かし、油でこすり、短冊形にそろえて、2か所に穴を開け、紐を通して綴じたもの。（幅6cm位×長さ45～60cm位）
- ・Biblos（ギリシア語。papyrus [ラテン語＝papyrus]
 - という植物の髄または内皮） → bible（英）
- ・Liber（ラテン語。樹木の内皮→書物の意） → livre（フランス語）
- ・Book、Buch など
 - 「ブナ」の木（Beech）に由来する。
 - boc [古代英語] → bece [中世英語] → beech
 - book（英）、Buch（独）

4. 1. 2 図書定義

- まず、図書の特徴ともいえるべきものをあげるならば、
 - ①コミュニケーションの道具であるということ、—— もう少し詳しく言えば、
 - ②文字、絵画等の視覚的シンボルを使用して意味を伝えようとするものである。
(文字、絵画等で記録された知識である。)
 - ③人々に確実に伝えるために公にされたもの (Publication) である。
- 図書の定義
「図書とは、知識、思想、感情を伝え広めることを目的として、視覚的シンボルによって、一定の形をした材料の上に記録された著作物のことである。」
- * なお、ユネスコでは出版物の統計のために次のように定めている。

- ①図書 ————— 印刷された非定期刊行物で、表紙を除き49ページ以上のもの
②小冊子 (Pamphlet) ————— ” ” ” ” 5～48ページのもの
③リーフレット (Leaflet) ————— ” ” ” ” 2～ 4ページのもの

4. 1. 3 図書の属性 (=要素=図書の備えるべき条件)

- ①Readable (繙読性)、②Portable (携帯性)、③Durable (耐久性) ということ (図書の3要素)、そしてその上に④Economical (経済的) であることが要求される。

4. 1. 4 三大紙料

数多くの書写材料が歴史の上に現われたが、下記のものを三大紙料と称している。

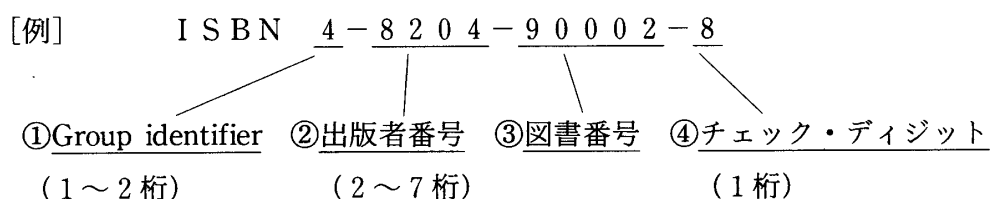
①Papyrus パピルス (BC 20世紀～AD 5 / 6 世紀)

②Parchment 皮紙 (BC 3 世紀～中世)

③Paper 紙 (AD 105～現代)

4. 1. 5 ISBN (国際標準図書番号)

- ・国際標準図書番号 (International Standard Book Number. ISBN と略称) は10桁で構成。“ISBN”に続けて10桁の数字が記載される。



Group identifier は出版国 (地域) を表わす。たとえば、0 = 英国圏、4 = 日本、91 = スウェーデン、などのように。

4. 1. 6 判型

A5 判 (教科書大)、B5 判 (週刊誌大)、菊判 (A5 判より少し大きい)、四六判 (B6 判)、四六倍判 (B5 判)、etc

4. 1. 7 図書の形態

- ・洋装本 (ハードカバー) の例：①表紙 (Cover)、②ジャケット [カバー] (Jacket)、③見返し紙 [きき紙と遊び]、④遊び紙 = 前とびら = 略標題紙 (Half-Title Page)、⑤標題紙 (Title Page)、⑥奥付 etc (ここでは製本の知識にも触れたり、授業では図解の必要もあるが、挿図等を含め本稿では省略する。)

4. 1. 8 脳・図書・図書館

脳と図書と図書館の関係は右のように表わすことができるだろう。社会的な記憶機構としての図書館は蔵書があるというだけでは駄目で、蔵書を検索するための手段が充分ほどこされていることが必要である。

脳 = 内部記憶 図書 = 外部記憶 図書館 = 社会的な記憶機構

こうした社会的な施設でもある図書館の起源は、人類が文字を発明し、記録類 (Graphic Records) を生産し始め、それを保存しようとする段階に達したところまで遡ることができる。

4. 2 逐次刊行物

4. 2. 1 定 義

逐次刊行物とは、「終期を予定せずに定期または不定期に継続出版され、同一の名称をかかげ、表示する巻号、年月次の順に刊行されるもの。雑誌、新聞、年報、年鑑、紀要などが含まれる。」と定義される⁽¹³⁾。

4. 2. 2 特 性

逐次刊行物の図書とは異なる特性を、図書との比較対照表のかたちで示す⁽¹⁴⁾。

項 目	逐 次 刊 行 物	図 書
内容の速報性	優る（新しい研究成果・ニュースなどを速報する目的）	劣る（これまでの知識・情報を概括して提供する）
内容の部分性	断片的、部分的（新たな情報）	総合的（総合された知識）
形態の一樣性	同じ標題で、大きさ、体裁も同一で刊行される。	1点1点が独立した標題や、異なった形態をとることが多い。
刊行の継続性	一定の間隔をおいて、同じ主題分野の記事を継続的に提供することを企図している。	その刊行時点で、あるまとまりをもった知識を提供しようとする。
執筆者の集合性	多数の執筆者による記事の集合からなる。	一つの著作が、一人または少数の著者によって著わされている。

4. 2. 3 逐次刊行物の誕生

17世紀半ば、Civil War の頃、人々にニュースを伝える手段として新聞が出てくる。一方、科学の世界でも新発見などの情報を伝えるのに、手紙に替わる新たな方法、つまり印刷による伝達手段が生まれた。1665年3月6日に発刊された“Philosophical Transactions”（Royal Society）は学術雑誌の嚆矢とされる⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾。

“Journal”の語の最も早い用例は1665年1月5日パリで刊行された“Journal des Scavans”であるという⁽¹⁷⁾。なお、この雑誌はしばしば最初の学術雑誌とされているが、この記事は書評と文学上の事柄のみであったから、厳密には学術雑誌とは言えない⁽¹⁸⁾。

4. 2. 4 ISSN (International Standard Serial Number. 国際標準逐次刊行物番号) (略)

4. 3 マイクロ資料 (Microform) ⁽¹⁹⁾

4. 3. 1 定 義

「マクロ資料」(Macroform. 図書、雑誌、新聞など、とくに拡大の必要がなく、肉眼で判読可能な資料)を何らかの方法で高度に縮小複製したもの。

4. 3. 2 特性など

当初は、入手困難な文献の複製入手や、長期保存に耐え難い資料の保存が目的であったが、今日ではその配布の容易さや経済性に着目した「マイクロ出版」が増大している。さらに、オンライン検索と連動させた一次文献の大量蓄積媒体としての役割が期待されている。近年は機械可読のデジタル・データをマイクロ画像として、直接マイクロフィルム（フィッシュ）面に出力させる COM=Computer-Output Microfilm (fiche) も導入されつつある。

4. 4 ニューメディア⁽²⁰⁾

従来のマイクロ資料が、いわばアナログ型の縮小複製であるのに対して、これからは、デジタル型のマイクロ化ともいうべきものの比重が大きくなり、コンピュータと通信とが結合したメディアによる資料が出現してきた。コンピュータ用の各種記憶媒体（＝磁気メモリーや光メモリーなど）はマイクロ資料の延長上にあるものとする説もあるが、ここでは、図書館資料全体のなかに一角を占める「ニューメディア」と位置づけておく。

4. 4. 1 特 色

- ①コンピュータを介在させる。
- ②情報の多くがブラウン管などの画面に表示される。
- ③情報の伝送に光ファイバーケーブルが用いられる。
- ④利用者にリクエスト性がある。
- ⑤情報に双方向性がある。
- ⑥情報の多くはデジタル化され、ディスク状の媒体に蓄えられ、検索スピードが極めて早い。

ここで注目すべきことは、④～⑥である。そこにニューメディアのニューメディアたる特質があり、そこから今後の在り方が定まってくると思われる。

4. 5 グレイ・リテラチャー⁽²¹⁾

4. 5. 1 特 色

- ①作成部数が少ない。
- ②通常の出版物流通ルートにのらない。
- ③配布範囲が限定されている。
- ④非売品であることが多い。
- ⑤資料形態が簡易であることが多い。（パンフレット、リーフレットなど）

4. 5. 2 種 類

- ①行政資料〔限定配布の政府公文書など〕
- ②テクニカル・レポート（科学や技術の問題に関する特定調査の詳細と結果を述べたレポート）
- ③翻訳資料
- ④学位論文
- ⑤会議資料
- ⑥プレプリント（全体を出版する以前に印刷・配布する。一つまたはそれ以上の著作からなる文献の一部）
- ⑦大学等の紀要
- ⑧企業の広告文献
- ⑨工業規格、仕様書

5. 出版と流通

5. 1 出版

5. 1. 1 印刷術以前

書物の生産は、ヨーロッパではプラトンの時代頃から商業的に「出版業」として成立するようになったと言える。ソクラテスは、書物は人間の記憶に比して劣るものと見ていた。彼にとって書物というのは、記憶のあやふやなところを確認するためという程度のものであった。しかし、プラトンの時代になると、書物の数もずっと増え、読書する人々が現われてきた。読書層の成立である。

ポリス〔都市国家〕が最高に栄えたその時代に、個人の尊重を説く人々が現われた。これら“ソフィスト”たちは、個人を犠牲にした全体主義的な国家体制に反対し、個人の尊厳を説いた。こうして、あらゆるものが民衆化していく。プラトンの思想なども分かりやすい形で解説された本が出回った。その他あらゆる種類のハンドブック的な本がつくられて、大衆にレディメイドの手軽な知識を提供した。こうして書物の量産時代＝商業的に出版業が成立する時代を迎えたのである。

当時の出版業は、読み手が読み上げるテキストを大勢の写字生 Scribe が一斉に書き取るというやり方で、大量生産を行なった。

中世には、書物の生産は修道院の書写室 Scriptorium などで細々と行なわれていた。(修道僧の日課の中で宗教上の行為として、分業で写本を生産したもので、元来は、営利が目的ではなかった。) 500ページの本を書き写すのに少なくとも1年はかかる。聖書1冊のために1年以上の歳月を要するし、それに使うパーチメントのために、子牛なら60頭位必要であった。

書写室は至って簡素で、机と椅子のほかには、インクとペン、それに鷲ペンを削るナイフ、パーチメントの表面を滑らかにするための軽石、罫を引くときの目じるしをつけるための針と定規、それに原本をのせる台と文鎮などがあるだけである。

古代には粘土板 Clay Tablet や木の書板 Writing Tablet に尖筆 Stylus を用いて記録したり、葦の茎を噛んで筆のようにしてパピルスに書きつけたりしていたが、ローマ時代には青銅 Bronze のペンが現われる。これには先端の割れたものとそうでないものがある。そして中世には鷲ペンが用いられた。また、インクの方法としてエジプト時代にはイカの墨や煤煙が用いられた。煤煙は、樹脂で固めたものを水で溶いて葦の筆を用いた。やがて、染料や硫酸化合物のインクが使われるようになる。また、金泥や銀泥は西洋では10世紀頃から用いられた⁽²²⁾。

5. 1. 2 印刷術以後

「印刷術」という語は、普通、活字によって組版を作る「活版」印刷術のことを指している。しかし、「活版」印刷術の発明以前に「木版」印刷が行われていた。それはいつごろ発明されたものか明らかではない(5世紀とも2世紀とも言われる)が、中国辺りから各地に伝わっていったものと考えられている。

法隆寺の「百万塔陀羅尼經」は年代の確かな世界最古の印刷物(770)と言われる。また、韓

村 田 修 身

国の仏国寺「無垢浄光大陀羅尼經」は751年以前に木版で印刷されたもので、年代はやや不明確であるが、世界最古の印刷物である。なお、唐代の「金剛經」(868)は世界最古の印刷(木版)された書物として名高い。

しかし、東洋の木版印刷と西洋のそれとは、技術的にやや異なる面がある。それは、東洋では版面は木の板目に彫るのに対して、西洋では木口(樹木の縦軸に垂直な断面)を用いることである。こうした東洋と西洋のねじれはどこで生じたものか、両者をつなぐ接点は未だ明らかにされていない。

金属活字による印刷は、ドイツのグーテンベルクによって1450頃に発明されたというのが定説であるが、これも起源は東洋にありそうである。現存する最古の金属活字本は、朝鮮で印刷されたものである。活字による印刷も東洋と西洋ではその方式がやや異なっている。西洋では、機械圧で活字に紙を押しつけたが、東洋では木版と同様に紙の裏から刷毛やバレンでこするのである。

活字(Movable Type)というのは、いうまでもなく、互換性、置換性がある。木版印刷の版木は、ある本のあるページを板に彫りつけてあるのだから、その版木で印刷できるのは、いつもきまった本のページである。ほかのページを印刷しようと思えば、また別の版木を用意してそれで印刷しなければならない。しかし、活字はどんな組み合わせにでも配列することができる。また、一度使った活字を組み直して、別のページや別の本を印刷するのに使うこともできるのである。その意味で、活版印刷術は、技術史の上では R. J. フォーブスが述べているように、「高度に革命的な発展であった。」⁽²³⁾

グーテンベルクの発明以後15世紀中に印刷によって作られた本を「揺籃期本」Incunabulaと呼んでいるが、この時代の印刷は、手書きのものを再現する、あるいは模倣することに多くの精力を注いだ。しかし、印刷術という新しい手段は、知識や情報を広めるのに威力を発揮する。印刷術は、当時始まっていたルネサンスの普及に貢献し、16世紀の宗教改革運動に寄与した。宗教改革と印刷術の関係はドイツの出版点数のデータ(下表)をみるだけで明らかである⁽²⁴⁾。

年 代	出版点数	備 考
1517頃まで	年間平均約 40点	
1519	119点	うち 50点がルター自身の著作
1520	200点	うち 133点がルター自身の著作
1525	498点	うち { 183点がルター自身の著作 215点が他の宗教改革者 20点が宗教改革反対者 } 計 418点

プラハ大学総長を務めたヤン・フス(1369頃～1415)の、チェコ語訳聖書は民衆教育の基ともなり、彼の教えは、宗教改革のほかに民族運動という一面をもっているのだが、免罪符批判をしたために教皇より破門され、遂に火刑に処せられてしまう。

ルターは、1517年10月31日、ウィッテンベルク城教会の扉に「95カ条の論題」を張り出した。これはラテン語で書かれていたが、直ちにドイツ語に訳され、印刷されて全国民の間に広まった。こうしてルターには多くの支持者が生まれ、彼が異端審問にかけられることから守ろうという人々も大勢いた。こうしてルターは火刑に処せられることもなく、次々と宗教改革関係の著作を発表し、宗教改革が進んでいくのである。たとえば、1520年の『キリスト教貴族に与える』は5日間で4,000部を売り尽くしたと言われる。また彼の新しい著作が出たときは、人々が印刷所の周りを取り巻いて、インクの乾くのを待ちかねて買い求めていったという⁽²⁵⁾。

フスの教えは「印刷術」以前であり、ルターは以後であった。実に「印刷術」の発明が両者の明暗を分けたと言えなくもない。

こうして、印刷術はルネサンスや宗教改革運動ばかりでなく、知識や情報を全世界にもたらしものとなった。これまで、知識は少数の者に占有されていたが、いまや、印刷された本によって、全世界の読み書きのできる人々に広がっていった。大量の本が大勢の人々に知識を拡散・普及させた結果、そうした中世の精神的枠組みが人々を拘束しつづけることはできなくなった。こうして印刷術は、中世の3大発明（印刷術、羅針盤、火器）の中で最も永続的で影響力の大きいものとなった。

〈製紙技術と印刷〉

なお、印刷術の基盤・背景となったものとして製紙技術を忘れることができない。上に写本から刊本への技術的変化を取り上げたが、刊本が経済的に引き合うものとなるにはそこに印刷機械にかけることのできる“紙料”の存在を欠くことができない。歴史上、人類はさまざまな書写の材料を産みだしてきた。粘土あり、パピルスあり、木や竹、さらに絹あるいはパーチメント（皮紙）もあった。これらの材料はいずれも印刷機械にかけるには適さないか、あるいは高価すぎた。

しかし、今やヨーロッパにも製紙技術が伝わってきていた。『後漢書』によると紙は中国の蔡倫によって A.D.105年に発明された。そして、いわゆる“紙の千年旅行”でサマルカンド～バクダード～エジプト～アフリカ北部地中海沿岸を経てヨーロッパに入った。こうして14世紀頃にはヨーロッパに製紙法が広まっていたことと、一方でカルタ、一枚絵、免罪符などの木版印刷が行なわれ、大量印刷技術を待望するという要因とがあいまって、より効率的な「活版」印刷術の出現が準備されていたのである。

〈書籍販売・図書館の変化〉

こうして、印刷によって大量生産された本が出回ってくると、本を扱う専門家達の対応のしかたも変化してくる。まず図書館においては、写本の時代には利用者が限定され、本は鎖で繋がれて、外部に持ち出すことはできなかった。

しかし、図書館の対応は徐々に変化していく。たとえその歩みが大層遅く、まどろっこしく思われたとしても、時代は確実に動いていくのである。写本から刊本へという技術面の革新が行なわれ、本に対する価値観など経済的な変化も現われてくる。保守的な図書館員の意識も変

わってくるのである。

〔技術的・経済的变化〕	〔図書館の対応〕
写本＝少数、高価、貴重	鎖付き、貸出不可
↓	↓
刊本＝大量生産、安価、(補充可能)	開架、貸出可

オックスフォード大学のボードレイ図書館は、オックスフォードをして英国でも有数の重要な大学たらしめた図書館であるが、この図書館が鎖を外すのは、漸く1757年になってのことである。これは、図書館が近代へ向けて踏み出そうとした画期的な一步と言える⁽²⁶⁾。

同じく本を扱う専門家である本の商人たちはといえ、もはや、高価で貴重な写本を少数扱ってればよかった時代は過ぎて、新しく印刷される本を大量に売りさばかなければならなくなった。こうしてやがて、町から町へと本を呼び売りして歩く行商人が生まれた。かれらは Hawker あるいは Chapman と呼ばれ、17～18世紀に隆盛をみる。また、かれらが扱った本は Chapbook と呼ばれる。

呼び売り商人たちは、金持ち階級ではない庶民階級にも本を売ることができるようになったわけであるが、Chapbook は何度も繰り返し印刷に使われてすり減った活字で粗末な紙に印刷された、安物の本が多かった。少年の頃のゲーテ (1749年生) もこうした安物の本を自分の小遣いで買って読んだという。

5. 1. 3 版と刷、著作と図書

〈版 と 刷〉

版と刷の違いは、日本の出版社はそれほど重視してこなかったようだが、目録法の教科書の中には刷の違いを版の違いと同様に認めるものもあった。それは図書館の先進国であるアメリカの成果を学んでいないものだろう。S. G. Akers によれば、何度目に印刷されたかよりも内容にいつ最新の変化があったかの方が重要である⁽²⁷⁾。

版と刷の違いを考える際には、紙型を手掛かりとすると分かりやすい。活字を組んでつくられた原版の上に特に用意された紙を押しつけて型 (紙型) を取り、これに鉛の合金を鑄込んで得られた鉛版で印刷するのである。紙型ができた段階で活字の組版はバラバラにされる。

①原稿 → ②活字の組版 (原版) → ③紙型 → ④鉛版 → ⑤印刷

できあがった本の評判がよくて増刷したいときは、③以下の手順を繰り返す。紙型を取り出してもう一度鉛版をつくって印刷するのである。刷次とは、こうして印刷を繰り返した場合の幾度目かを示す順序のことである。

内容に変化がある、つまり原稿の書き直しがあつた場合、これは手順の①に戻るから、また改めて活字の組版 (原版) をつくらなければならない。こうして、版が改められた場合には新たに別の紙型がつくられることになる。すなわち、幾度印刷されようと、元の紙型が変わらない限り、それらはすべて同一の版なのである。

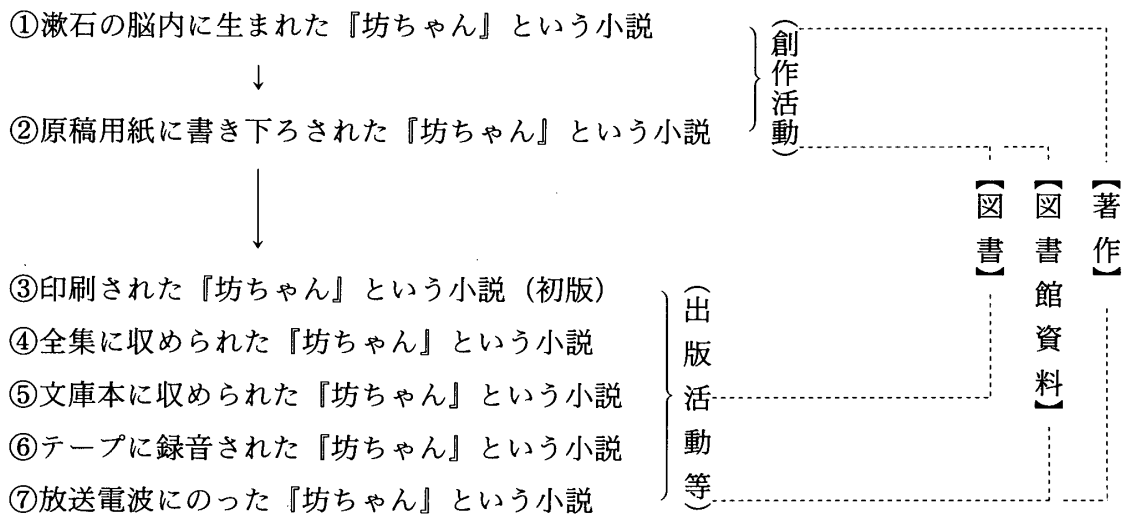
なお、誤植の訂正の場合、③の紙型を変えることはできないが、良心的な出版社は④の鉛版

を象嵌の技法で修正するのである。

目録法上、出版年とは最新の版の成立年のことで、刷次は特別な場合を除いて記載されない。それでは刷は無意味かという、そうではない。最近の新聞広告にはある本が第何刷かということを書き添えているものがあるが、刷を重ねているということは、その本の評価を示す一つの尺度であるとも見ることもできるのである。

〈著作と図書〉

著作と図書の関係には、バートランド・ラッセルの物質構造と事象構造の考え方を当てはめることができる。たとえば夏目漱石の『坊ちゃん』についてみよう。



「図書」（広くは「図書館資料」）は、それぞれ物質構造が異なっている。しかし、①～⑦までを通してそこには変化しないもの（事象構造）がある。この事象構造の変わらぬものが「著作」である。

5. 2 現代日本の出版と流通の概況

5. 2. 1 図 書

以下、主に『出版年鑑』のデータによってみていくことにする。

・出版点数：

年度ごとの出版点数の推移をみると、新刊書の出版点数が2万点を超えたのは1971年、3万点を超えたのはほぼ10年後の1982年、そして1990年には4万点を超えた。最新の統計は1993年で48,053点に達している。つまり、新刊書の出版点数は1980年代後半には1日に100点余であったが、今ではそれを遥に上回るようになってきているのである。しかし、これらの書物のうち読者の目に触れ、手に取られるものは一部に過ぎない。

・発行部数/売上金額：

新刊・旧刊合わせた総発行部数（推定）は1991年には14億冊を超えた。これは30年前（1961～63年は2億冊台）のおよそ7倍に当たる。しかし返品が多いという体質は依然として改善されていないようである。1960年代～70年代前半には35%前後の返品率であったが、これは現在も同様と考えられる。返品された本は、さっさと裁断されて紙屑として処分されてしま

村 田 修 身

う。もし保管しておこうとすれば、倉庫料も必要だし、資産とみなされて税金もかかるからである。返品問題は委託販売とも関連がある。

なお、1993年1年間の書籍の売上総額は、9,916億8,237万円であった。

・出版社/小売書店/取次：

出版社	4,324社 (1993年末現在) ⁽²⁸⁾
小売書店	27,804店 (取次が取引をする相手は1万店程度) ⁽²⁹⁾
取次 (大手)	2社
(中小)	40社

新刊書の発行部数は、通常3,000部程度であるから、仮に各書店に1部宛配本しても3,000店にしか届かない。実際には、有力小売書店には複数配本されるから、全国の書店の9割以上には新刊書は全く並べられないということになる。北海道のある小さな自治体が自ら書店の経営を始めたのも僻地の文化的ハンディキャップを幾分なりとも乗り越えようとする試みとして注目される。

・出版流通ルート：

1970年代初めにおける出版物の基本的流れを表わしたものが図1⁽³⁰⁾である。最近の出版流通のルートを列挙すれば次のようである⁽³¹⁾。

① 書店ルート、② 教科書ルート、③ 輸出入ルート、④ 図書館ルート、⑤ 生協ルート、⑥ 割賦販売ルート、⑦ 鉄道弘済会ルート、⑧ スタンド販売ルート、⑨ コンビニエンス・ストア・ルート、⑩ 卸売ルート、⑪ 政府刊行物ルート、⑫ 直販ルート、⑬ 農協ルート、⑭ 新聞販売ルート、⑮ 通信販売ルート、⑯ 宗教書ルート、⑰ 流派・家元ルート、⑱ 図書教材ルート。その他に⑲ ブッククラブ (1969年12月発足、70年活動開始) ⑳ 地方小出版物流通センター (1976年創設。地方からの情報発信に寄与) ㉑ 書籍宅配システム (1986年から新たな出版流通システムとして加わった) といったルートがある。

・委託販売/再版制度：

わが国の出版物の販売方法は、多くが委託販売制で、ある期間に売れなければ返品される。返品された本は裁断されて紙屑として処分される。保管しておけば、倉庫料だけでなく、税金もかかる。これは返品率の高さとも関連して大きな問題であり、1969年に出版販売合理化協議会で雑誌の返品問題に続いて図書の返品減少について研究協議がなされたが、未だ根本的な方策がみつからない状況である。

図書の定価販売は大正8 (1919) 年から始ったとされる⁽³²⁾。は現在は、独占禁止法の適用除外である「再販売価格維持契約」によって定価販売が認められている。

5. 2. 2 雑 誌

・発行部数・売上金額 (1993年末現在)：

1993年1年間に創刊された雑誌が44点ある一方で、休刊あるいは廃刊が152点。

出版界は“雑高書低”状況といわれる。つまり、1993年1年間の雑誌売上金額は、1兆

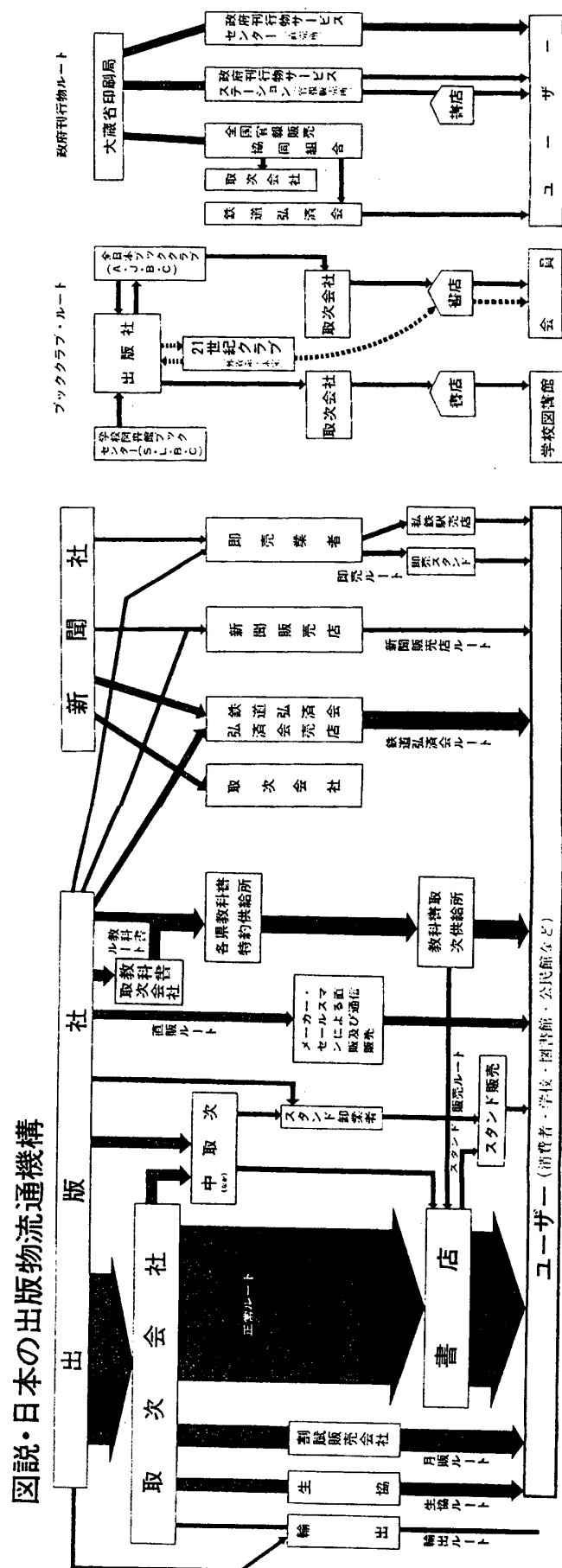


図1 出版流通ルート

村 田 修 身

5,006億1,956万円に及び、書籍の9,916億8,237万円に比べて1.5倍以上となっており、推定発行部数も49億4,588万冊と書籍の約3.5倍に達するのである⁽³³⁾。

5. 2. 3 非活字出版（1993年末現在）：

この数年「電子ブック」「CD-ROM」「デジタル・ブック」など、いわゆるマルチメディア出版物が登場しているが、このうち最も普及率の高いのは「電子ブック」で142点出版されている⁽³³⁾。

5. 3 出版界と図書館

出版界の“雑高書低”〔雑誌の比率が図書よりも大きい〕に対して図書館側は、大学や専門図書館を除いて、多くの公共図書館ではその逆である。資料費は圧倒的に図書の方が多く、雑誌に当てられる部分が少ない。そして資料費の割合だけでなく、図書館員の意識も“書高雑低”の時代が長く、いまその革新がせまられている。

6. 出版物の情報

6. 1 出版流通情報

〈いつ〉〈どこから〉〈どんな〉出版物が出された（あるいは出される）かを知ることは、図書館の日常的な収集・選択業務に欠かせない。

以下に出版流通情報の主なものを、『図書館ハンドブック』⁽³⁴⁾から抄出したものを中心に紹介する。

6. 1. 1 出版社から

各出版社個々の新刊案内や在庫目録などのほかに次のようなものがあげられる。

(イ) 一般読者や図書館に向けての案内

①『これから出る本』（日本書籍出版協会。網羅的な新刊案内）

②『図書』（岩波書店）、『本』（講談社）などPR誌

(ロ) 図書館向け（各社がばらばらに発行している新刊案内をまとめて図書館に送付）

①ライブラリー・アド・サービス（1985. 6. 開始）

6. 1. 2 取次から

大手取次が対象別に発行している新刊情報誌がある。

	〈ト ー ハ ン〉	〈日 販〉
(イ) 一般読書人向け	『新刊ニュース』（M）	『新刊展望』（M）
(ロ) 図書館向け	『新刊情報』（W） 『新刊図書目録』（M）	『ウィークリー出版情報』（W）
(ハ) 書店向け	『トーハン週報』（W）	『日販速報』（W）

6. 1. 3 図書館側から

①『日本全国書誌週刊版』（国立国会図書館。CD-ROM 版の『J-BISC』もある。）

②『選定図書速報』（日本図書館協会）

6. 1. 4 その他

①『Clipper』（日本エディタースクール出版部）

②『出版ニュース』（出版ニュース社）など

6. 2 既刊情報

出版流通情報が主に新しく出された（あるいは出される）本を対象としているのに対して、ここでは既に出版された本の情報を扱う。

6. 2. 1 網羅的な情報〔その1：前年1年間に出版された本のリスト〕

①『日本全国書誌』（国立国会図書館。『日本全国書誌週刊版』をまとめたもの）

②『出版年鑑』（出版ニュース社）など

6. 2. 2 網羅的な情報〔その2：これまでに出版されたもののうち、いま手に入る本〕

①『日本書籍総目録』（日本書籍出版協会。1994年版は書名編3冊、索引編1冊の全4冊。475,680点のいま、手に入る本が掲載されている。）

6. 2. 3 主題分野別の情報

①『歴史図書総目録』（歴史図書目録刊行会）

②『女性問題図書総目録』（同刊行会）など

6. 2. 4 選定リスト

①『選定図書総目録』（日本図書館協会）

6. 2. 5 出版社や流通ルートが限定されたりしているもの

①『政府刊行物等総目録』（全国官報販売協同組合）

②『あなたはこの本を知っていますか』（地方・小出版物流通センター）など

6. 2. 6 文庫版・新書版など

①『便利な文庫の総目録』（文庫の会）

②『新書総目録』（同刊行会）など

6. 3 書 評

①『書評年報』（同刊行会）（年間約6,000点。書評者名のあるもの）

②『リテレール』（季刊）

③『週刊読書人』、『図書新聞』等の週刊新聞

④『出版ダイジェスト』（梓会）

⑤『政府刊行物等総目録』（全国官報販売協同組合）など

7. 図書館資料の選択と蔵書構成

7. 1 図書館資料の選択の意義

図書館はサービス機関であり、その機能は資料や情報の提供にあると言われる。ここで、図書館資料論の視点から図書館の目的を以下の2点に集約しておこう。

①利用者に資料や情報の提供というサービスをすること。

②後世に貴重な資料を残すこと。

これは、現在及び未来の利用者のニーズに応える、あるいはニーズを満たすということである。即ち、ここで、図書館資料論の課題は図書館活動論と結びつくのである。

図書館の蔵書構成は、利用者のニーズを充足するものという当たり前の考え方が図書館界に広まったのは比較的新しい。20世紀の前半の日本では図書館は社会教育の機関と位置づけられ、「思想善導」など軍国主義の教育に加担した。そのような方向は論外であるが、図書館における蔵書構成や図書選択の基本方針には未だに「教養書中心」主義の根が残っているように見受けられる。教養書それ自体が悪いわけではないが、愚かな民衆を“お上”が導いてやろうという発想は問題である。かつてある図書館員が体験したエピソードを聞いたことがある。それは、毎日図書館に通ってくる利用者が閲覧請求する本がいつもいわゆる“柔らかい”本なので、たまにはもっとまじな本を読んだらどうかと注意したくなった。しかし、結果的には注意しなかったのであるが、後にその利用者が高名な作家（獅子文六さんであったか？）と知れて、その館員は「注意しなくてよかった」と述懐していたというものである⁽³⁵⁾。

7. 2 図書館資料の選択と提供の在り方

人口の少ない町村の、資料費の予算も非常に限られている図書館で、その蔵書には立派な装丁の『夏目漱石全集』のような本ばかりが備えてあるというケースをかつてはよく目にした。この場合、二つのことが考えられる。まず、多様な蔵書構成ができるように資料費を増やす努力をすること。もう一つには、当面の予算の制約の対策として、漱石やシェークスピアといった大家の作品は代表作だけに止めておき、もっと他の資料の購入に予算を当てることである。そして、それら大家の作品でその館に所蔵していないものがリクエストされた場合、それは県立図書館などから図書館間貸出によって借りて提供するというやり方もあるだろう。

ただし、図書館利用に不慣れな人の場合、図書館にやってきて自分の欲しい本が見つからなかったら、諦めてそのまま帰ってしまうことがある。図書館にやってくる人は時間をかけて、わざわざ足を運んでくるのである。そして図書館で自分の探す本が見つからなければ、どこの図書館にも自分の欲しい本は置いてないと思うかも知れない。ここの図書館にないのなら別の図書館で探してみようと思えることはまずあり得ない。（それは、図書館の数が少なすぎることに由来する。書店の数は大きな市では割りと多いので、ある店にない場合、別の店に行ってみようと思える人も多いだろう。しかし、図書館の場合はほかにあてにできる図書館が存在することは稀である。）

したがって、規模の小さい図書館では特にPRが大切になる。図書館というのは水道の蛇口のようなものである。この小さい町には小さい蛇口しかなくて水の量も少ないように見えるかも知れないが、この蛇口は後ろでみなつながっているのである。この後ろには近隣の市町村の図書館、県立の図書館、そして国立国会図書館までつながっており、さらに必要ならそこから全世界にまで続いていくのだということを知らせなければならない。最近はそのことに熱

心に取り組んでいる図書館が増えた。滋賀県の草津市立図書館もその1例である。

滋賀県は、図書館の面では先進県ではなかったが、これまで図書館のなかった自治体にも次第に設置されるようになってきて、全国的に注目を集めている。草津市立図書館も比較的新しい図書館であるが、そこには職員の手作りの案内板が柔らかい雰囲気で見しめを誘っていた。この図書館にない本はリクエストして欲しい旨の案内板の文言に、図書館は「草の根分けても探します」とあって、図書館員達の意気込みが感じられた。

このように、利用者のリクエストに積極的に応えていこうとするのが、新しい図書館活動の流れとなっている。

それでは、利用者の要求 (Demands) に何でも応えていけばよいのかというと、そうではない。これには二つの問題がある。

〔その1〕利用者の要求する本はすべて買うのか否かという問題の判断：

- ①予算の関係で他の図書館から借りて済ませるかどうかな。(高額だからという安易な理由で借りるのはいけない。それでは相手の館に迷惑をかける。)
- ②差別につながるものや、人間性を貶めるものはいけない⁽³⁵⁾。

〔その2〕利用者から要求されるものさえ買ってあげばよいという姿勢：

これは、利用者から申し出があるまでは何もしない(あるいは、あまり積極的な選書をしない)ということにつながりかねない。それでは利用者の信頼を失う。

また、設置者の意向を考慮するということがある。図書館の設置者はだれか。表面的にみると、県立図書館なら県知事、市町村立図書館なら市町村長というふうに思うかも知れない。しかし、真の設置者は住民であることを忘れてはいけない。私立の図書館はどうかというと、この場合でも、不特定多数の利用者を想定している場合や、公共的な性格がある場合は一般の利用者のニーズをも考慮しなければならない。

一方、一般の利用者の側の〈良識派〉も問題である。公の費用で買うものは、社会の文化水準を高めるような優れた内容の本であるべきで、通俗小説などで文化水準を低迷させ、風俗を乱してはならない、といった考え方である。こうした〈立派な〉考えに図書館員が巻き込まれてはいけないことは言うまでもない。

7.3 選択と蔵書構成

図書館資料の選択に当たる者が、1冊1冊をよく吟味して、良い本だけを買ってあげれば、ひとりで蔵書構成が立派なものになるだろうと考えるのは早計である。個々の本に万全の注意を払って選択しているだけではだめで、全体を見渡すことを忘れてはならない。「木を見て森を見ず」になってはいけないのである。たった1冊の良書だけを買って、その関連図書を置かないならば、その良書自体が妙に浮いてしまって、本が持っている力を発揮できないということもある。このことは、図書館の蔵書のポテンシャルティということとも関連がある。ベーコンが言うように「水は、天からふるしずくであろうと、地からわき出る泉であろうと、それをおさめたくわえるところに集められ、そこでいっしょになって強まりもちこたえるのでなけれ

ば、分散して地中に消えてしまう。」⁽³⁶⁾雨の1滴1滴がダムに蓄えられ、発電機によってそのエネルギーが取り出されるように、1冊1冊の本も集合体になったときに情報のポテンシャルが生ずるのである。

また、通俗雑誌や雑書のコレクションが多くの研究者にとって重要なものとなっている大宅壮一文庫の例にみられるように、いわゆる「良書」のコレクションだけが役に立つわけではない。

ここで、「図書館資料論」と「図書館活動論」の両方に関わる〈知的自由〉の課題が見えてくる。しかし、それはまた稿を改めて取り上げることにしたい。

8. 図書館資料の多様化と読書行動の変容～結びにかえて～

人類の知的記録類の全般を対象とした「図書館資料論」は、本稿の始めに見たとおり、「社会活動の基礎として」の考察や、「社会における役割の検討」をその課題の一つとしていた。図書館は国民の「読書の自由」や「知る権利」を保障する機関とされるが、マルチメディアの実験が開始されたいま、利用者の側の視点に立つことが一層重要になってきている。その意味でも、図書館資料が今後どのような発展をとげるのかを見ていく必要がある。

図書館の資料は、長い間本が中心であった。本の歴史を巨視的に見ると、まず、手書きで本をつくる写本の時代があり、やがて印刷による本＝刊本の時代となり、さらに、ハードカバーの本ばかりでなく、ペーパーバックのもの、文庫本などの小型の本が数多く出版されるようになり、そこに音声メディアなど多様なものが付け加わった。

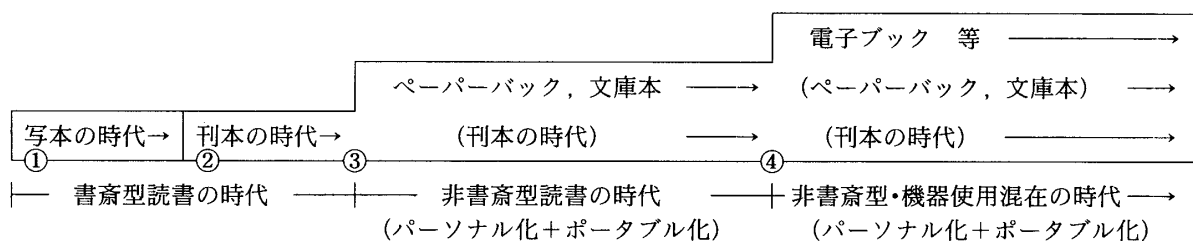


図2 本と読書の歴史

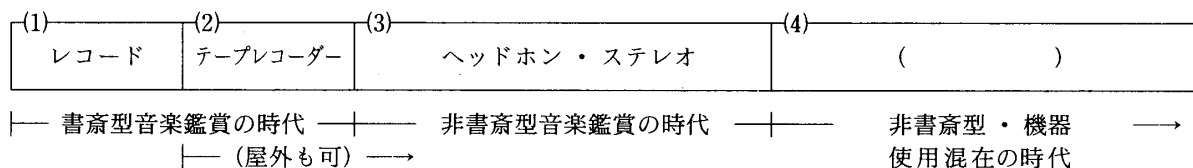


図3 音声メディアと鑑賞の歴史

本の歴史と読書の歴史を重ねてみる。(図2)本の歴史①の写本の時代は図書館に足を運んで読書しなければならない。②の刊本の時代に入ると、図書館から館外へ本を持ち出すことができるようになるが、本を読むときには書斎で机(あるいは書見台)に向かって読書するスタイルである。この①と②の読書スタイルを「書斎型の読書の時代」と呼んでおこう。③になってペーパーバックや文庫本等が出てくると、本を読むのに必ずしも机に向かっていなくともよいことになる。③は「非書斎型読書の時代」(通勤途中の乗物の中でも、寝ころびながらでも読書できる)とすることができる。読書は元来が個人的な行為であるが、この③で「パーソナル化」の上に「ポータブル化」が加わった段階に入ったのである。

本の歴史の第④段階では電子ブック等の非活字出版が登場した。この新しいメディアに接触する場合、これまでの本とは違って、何らかの機器を用いなければならない。

現代は、「読書」スタイルに機器使用が持ち込まれた時代である。ただし、このようなスタイルが主流となるかの如き論議はそのまま受け入れることはできない。たとえば、寝ころびながら文庫サイズの推理小説を読むのと同じように、手のひらサイズの機械で「電子版」の推理小説を読むといった読書スタイルが日常のものとなるであろうかということを考えなければならない。「電子版の本」の場合、何かのデータを取り出すような場合はよいが、軽読書にはあまり馴染まないのではないと思われるのである。

音声メディアの場合、図3で(1)の段階は室内で音楽鑑賞をする時代、(2)は(1)に引き続き、室内での音楽鑑賞の時代であるが、屋外に持ち出すことも可能となった段階である。(3)は歩きながらも、乗物の中でも、外出していながらも音楽鑑賞ができる時代である。すでに(2)の段階で音楽鑑賞の「ポータブル化」の芽が出てきたが、(3)の段階で「ポータブル化+パーソナル化」が進行した。

音声メディアの(4)は、VOD(ビデオ・オン・デマンド)のようなマルチメディアの影響による新たな段階に入ることになるのかも知れない。

本と読書の歴史、音声メディアと鑑賞の歴史のいずれにしても、今後の発展は人々の選択の問題であり、将来の変化を見守っていかなければならない。

注

(1) 日本図書館協会図書館学教育部会『図書館学教授要目』1976. (p. 24)

(2) 同上 (p. 24~27) なお、これ以後いくつかのテキストが出されたが、そのうち次の二つの構成をあげておく。

(A)『図書館学教育資料集成2: 図書館資料論』白石書店, 1978.

1. 総論	4. 図書の収集・受入と蔵書管理
2. 図書館資料と知的自由	5. 図書以外の図書館資料
3. 図書の評価と選択	6. 地域資料

(B)『現代図書館学講座2: 図書館資料論』東京書籍, 1983.

1. 序説	4. 蔵書構成
2. 図書館資料の流通	5. 図書館資料の収集・受入・保管

3. 図書館資料の評価と選択

- (3) 図書館法 1950. 4. 30.
- (4) 社会教育審議会「新しい時代（生涯学習・高度情報化の時代）に向けての公共図書館の在り方について－中間報告－」1988. 2. 9.
- (5) 『図書館ハンドブック』増訂版, 日本図書館協会, 1960. (p.194)
- (6) 『新・図書館学ハンドブック』雄山閣出版, 1984. (p.134)
- (7) 小倉親雄教授の図書館学講義 (1960) による.
- (8) 『新・図書館学ハンドブック』雄山閣出版, 1984. (p.111)
- (9) 長澤雅男『情報検索入門』（初等情報処理講座3）森北出版, 1971. (p.26)
- (10) 同上 (p.44)
- (11) 『図書館ハンドブック』第5版, 日本図書館協会, 1990. (p.221)
- (12) 同上 (p.126)
- (13) 『日本目録規則』新版予備版, 日本図書館協会, 1977.
- (14) 『図書館ハンドブック』第5版, 日本図書館協会, 1990.
- (15) Boorstin, Daniel: The Discoverers. 1983. 鈴木主税, 野中邦子訳『大発見』③ 集英社文庫, 1991. (p.208)
- (16) Osborne, Andrew D.: Serial Publications. 3rd ed. A. L. A., 1980. (p.29, 30)
- (17) Boivin, Emile: Histoire du Journalisme. 城戸又一, 稲葉三千雄共訳『新聞の歴史』（文庫クセジュ）白水社, 1961.
- (18) Boorstin, Daniel: The Discoverers. 1983. 鈴木主税, 野中邦子訳『大発見』③ 集英社文庫, 1991. (p.208)
- (19) 『図書館ハンドブック』第5版, 日本図書館協会, 1990. (p.192)
- (20) 同上 (p.126)
- (21) 同上 (p.190, 207)
- (22) 富永牧太教授の講義「稀覯書誌学」(1961) による.
- (23) Forbes, R. J.: Man the maker. 1950. 田中 実訳『技術の歴史』岩波書店, 1956. (p.133)
- (24) 小倉親雄教授の図書館学講義 (1960～61) による.
- (25) 松田智雄「ルターの思想と生涯」(『世界の名著 18. ルター』中央公論社, 1969) (p.27)
- (26) 小倉親雄教授の図書館学講義 (1960) による.
- (27) Akers, Susan Grey 著, 中村初雄, 大内直之共訳『洋書目録法』日本図書館協会, 1951.
- (28) 『読売新聞』1994. 10. 27. (p.11)
- (29) NHK テレビ, 1993. 9.
- (30) 『出版年鑑』1971年版
- (31) 『図書館ハンドブック』第5版, 日本図書館協会, 1990. (p.147)
- (32) 同上 (p.148)
- (33) 『読売新聞』1994. 10. 27. (p.11)
- (34) 『図書館ハンドブック』第5版, 日本図書館協会, 1990. (p.156)
- (35) 前川恒雄氏談による.
- (36) Bacon, Francis: The Advancement of Learning. 1605. 服部英次郎, 多田英次訳『学問の進歩』岩波書店, 1974. (p.126)